米国における映画制作の実践とその教育について

後藤 昌人[*1]・首藤 みなみ[*2]・星野 明日香[*2]・杉山 綾菜[*2]・三輪 奈那[*2]・石川 沙貴[*2]・
鬼頭 愛音[*2]・木全 都[*2]・近藤 瑛子[*2]・高橋 柚衣[*2]・池田 朱里[*2]・水元 芽生[*2]

email: masato@kinjo-u.ac.jp

*1: 金城学院大学　国際情報学部　国際情報学科
*2: 金城学院大学　現代文化学部　情報文化学科

◎Key Words　映画制作、教育プログラム、映像コンテンツ

1.　はじめに

2012 年 3 月上旬の 8 日間、我々は米国ロサンゼルスにおいて、ショートフィルム制作を行った。そのプロセスは New York Film Academy（以下 NYFA）において始めの 4 日間の授業で映画制作に必要な基礎知識、カメラの使い方、持ち込みをした脚本指導、ディレクティングなどを習得する。そして、2 日間かけてユニバーサルスタジオのバックロットを使用して撮影を行い、最後の 2 日間で編集技術の習得および撮影した映像の編集、スクリーニングまでを行うものである。当初本研修を計画した際には、世界トップレベルの環境での学習機会の提供が主な目的でもあったが、結果的に想定を超えた学生の満足感や達成感が得られる研修となった。本稿では、今回の研修実施から得られた NYFA の学校関係者や教員の映画制作教育に対する考え方などを整理するとともに、実際に現地で学んだ学生が得た知識や経験など、研修を実践したことによる想定を超えた効果についても考察を行う。

2.　米国での映画制作の動機と意義

米国における映画制作の大きなきっかけは、2012 年 4 月に誕生した金城学院大学国際情報学部の新設である。授業の一環として、一年生の終わりに海外研修を必修化させることが決まり、その研修先の一プランとしてロサンゼルスでの映画制作を、当時筆者と同学部の中田平教授と共に計画をした。同時に我々のゼミ生は、今まで映像を始めとする様々なデジタルコンテンツの制作に取り組んできた。その制作を通じて、理論や理屈で学ぶもの要素に加え、実際にやってみたことによる体験知を得ることの重要性を大きく感じていた。そこで、就職活動を控えていた当時 3 年生のゼミ生を中心に新学部でのプレ研修的な位置づけで募集を行い、NYFA の授業料が一人$2000 という条件であったが、31 名の学生が参加をした。教育的な意義としては、デジタルコンテンツ制作の多くの要素を含んだ映画制作へのチャレンジとその経験を通じた学生自身の成長である。

3.　NYFA における教育の特徴

NYFA ロサンゼルス校での教育の特徴は、主にその環境と、学生一人一人の考えやアイデアを尊重することが徹底されている点である。環境については、ハリウッド映画の撮影でも使用するユニバーサルスタジオのセットを学生も使用できることが、何よりも大きなモチベーションを作り出す。また、座学においても学生に知識や理論を押し付ける教育ではない。映画撮影の基本原則を示した上で、その原則に沿うか沿わないかの判断は撮影者である学生次第だという考えがすべての教員やスタッフに浸透している。また、「映画撮影の初心者」という扱いではなく、撮影技術や機材の操作スキルについてもレベルの高い内容を教え、撮影環境もプロが制作する映画さながらの環境の準備をバックアップしてくれる（図 1）。

図 1：ユニバーサルスタジオのバックロットでの撮影風景

学生の要求に対してはスタッフが最善を尽くし、撮影時には的確に指導され、学生が計画したプランに対して妥協をしない撮影を求める。そして何よりも常に映画制作を楽しむという姿勢が教育の随所に出ていた。

4. 学生による自己評価と実践効果の考察

4.1 学生視点での変化

現地で研修中の学生は客観的に見ていても非常に生き生きとしており、必死さと何かを学び取ろうという姿勢が感じられた。現地で 8 日間の研修を終えた時、ほとんどの学生が、この研修に参加してよかったと口を揃え、またこの場に戻ってきたいと真剣に希望する者もいた。

帰国後、数名の参加した学生に研修を通じて学んだことや心境の変化などについてヒアリングを行った。渡航前、研修中、帰国後それぞれのフェーズに関する詳細は下記の通りである。

（渡航前）

- 海外へ行くことの魅力はあったものの、なぜ映画制作なのか？何の為に映画を撮るのか？なぜ日本ではだめなのか？と頭の中は疑問符だらけだった。
- 映画に関する知識も少ない中、映画を自分たちで作るという実感が湧かなかった。

（研修中）

- 講義が進むにつれ自分たちが書いてきた脚本や計画が甘いことに気づいた。
- 撮影方法の話し合いは難しかったが、チーム内で徐々に意見が出始めミーティングはいい雰囲気になっていったと思う。
- 撮影の当日、現場で初めてお会いした関係者や現場の雰囲気に圧倒された。

（帰国後）

- 自分の思いを仲間や関係者に伝えること、チームとして同じ意識をもって進んでいくことの重要性を学んだ。
- 現地では自分は全てを映画のことに向けていて、褒めてあげてもいいぐらい頑張っていたなと自分を認めることができた。

4.2 実践により得られた効果の考察

以上のように個人差はあるにせよ、多くの学生が今回の経験からそれぞれ満足感や達成感を高いレベルで得ていたことが伺える。この成果を紐解くと、そこにはジーン・レイヴらが述べる「状況に埋め込まれた学習」[(1)]に近いことが起こっていたとも考えられる。つまり、学生は異国の地、ハリウッドというロケーションで目的を一つにするチームという共同体[(2)]で学ぶという営みを実践したことで（コミュニティ・オブ・プラクティス）、この状況でしか得られない特別な学習に結びついたと考えられる。

これらの枠組みに今回の研修を照らし合わせると、想像もし得ない環境が与えられたことに始まり、映画制作に関する細かなプロセスを飛ばし、いきなり実践をせざるを得ない状況を作り出されたこと、意図的に作られた訳ではない撮影チームで作品を完成させなければならない目的があったことはまさにその「状況」である。その上で、想像もし得ない環境が与えられたときの期待と喜びと不安のバランスが結果として撮影チームとしての結束力を強め、個人が持っている意見を寄せ集めてみんなでいい作品を作りたいという思いが目の前の問題を乗り越える原動力となった。撮影チームという一つのコミュニティーの中で、それぞれの意見がチーム内でまとまったり公的に認められたりするプロセスが個人の役割を明確化させ、お互いに高め合いながら実践できたと言える。

そして、ハリウッドで映画を撮影しているという事実が生み出す満足感を背景に、何かを学習するとか知識を得るということよりも、映画を完成させるという「実践」に、結果として「勉強」がついてきた状況が出来上がっていたのだと考えられる。

5. おわりに

今回の研修では、学生がハリウッドで映画を撮影するというプランとしては魅力的だが、教育的には一見無謀とも言えることを実践した。現地での教員やスタッフの言動から得ることは非常に多く、学生は言葉の問題に歯がゆさを感じながらも、その成果は意図せざる良い効果であったと言える。このことからも、状況が作り出す実践の重要性とその経験が机上での学習や勉強では得られない効果があることも確認できた。今後も同様の研修プランを継続的に実践していきたい。

参考文献

(1) ジーン・レイヴ, エティエンヌ・ウェンガー 「状況に埋め込まれた学習−正統的周辺参加−」産業図書, 2011

(2) エティエンヌ・ウェンガー, リチャード・マグダーモット, ウィリアム・M・スナイダー「コミュニティ・オブ・プラクティス−ナレッジ社会の新たな知識形態の実践−」, 翔泳社, 2010

謝辞

本研究は、平成 23 年度公益財団法人市原国際奨学財団の助成による。